学苑・総合教育センター特集　No. 787　39～46（2006・5）

ヘレン・マイアー『寝巻き』について

寺　島　政　子

1. はじめに

ヘレン・マイアー（Helen Meier）は1929年，スイス東部のザンクト・ガレン州にあるメールスに教師の娘として生まれた。自らも教員養成所を終了後，小学校の教師になったが，それに満足せずその後，外国へ出る。家事手伝いなどをしながらイギリス，フランス，イタリアで生活し，スイスへ帰国してからは，フリーブール大学で言語学と教育学を専攻した。しかし4学期間だけ学んで大学を去っているので，卒業はしていない。スイス赤十字社に勤務し，チベット難民の世話などにあたった後，アッペンツェル・アウサーローデン州の養護学校で，もう一度教員生活に戻る。

作家としてのデビューはかなり遅く，1984年，マイアーが55歳のときである。最初の著作は，ここで取り上げる『寝巻き』（Nachthemden）を初めとして23の短篇を収めた『乾いた草原』（Trockenwiese）という作品で，この短篇集によってマイアーは，同年のインゲボルク・バッハマン賞のエルンスト・ヴィルナー奨学金を得て，一躍脚光を浴びた。このときの成功がきっかけとなり，1987年からは作家としての活動に専念している。

作品は短篇が中心で，1985年には『たった一つの色つきの物』（Das einzige Objekt in Farbe. 13 neue Geschichten），1987年には『湖畔の家』（Das Haus am See），さらに『笑い』（Das Gelächter），『最後の警告』（Letzte Warnung），『愛する声』（Liebe Stimme）などを世に出しているが，自伝的といわれる『生を生きる』（Lebenleben）や，『修練女』（Die Novizin）などの長編も書いている。また1995年には唯一の戯曲『食べられたバラ』（Die gegessene Rose）が初演されている（この戯曲は出版されていない）。また1984年の受賞の他，1985年にはオーストリアのザルツブルク州の文学賞，1985年と2000年にはスイスのシラー基金の賞，2000年にはアネッテ・フォン・ドロステ・ヒュルスホフ賞などを受けており，評価が定着している。

『寝巻き』は掌編小説の性格を備えた作品で，老人ホームで暮らす五人の女たちがホーム前のベンチに座って，それぞれの人生を自分の頭の中で振り返るという，それだけの話である。だがこの短い話の中から読み取れる，人生あるいは老人についての考え方には興味深いものがある。ここでは物語の構成，特徴，意味などについて考えてみたい。

2. ストーリーと構成

最初に述べたように，『寝巻き』は掌編小説としての性格を持った作品である。作品の長さ（あるいは短さ）はページ数にして9ページほど，掌編小説としては比較的長い部類に入るかもしれない。しかし「語りの時間」と「語られる時間」は一致している。物語の中ではベンチに座った五人の年老いた女たちそれぞれの人生が簡単に語られている。しかしそれは各自の頭の中だけの断片的な回想と

いう形をとっているので，「語られる時間」は彼女たちがベンチに座りながら想い出にふける時間だけで，全部あわせても二十分程度であろうか。

またいわゆる起承転結があるわけでも，場所の移動があるわけでもない。物語は「エーベネツァー・ホームの前のベンチに五人の女が座っていた」(34) というところで始まり，「五人の灰色の女たちが，エーベネツァー・ホームの前のベンチに座り，車の行き交う通りのほうを眺めている」(42) というところで終わっている。物語の中で何かが起こるというわけではなく，また何らかの結末があるわけではない。果たして五人の女たちがどうなったのか，読者には何もわからない。結末は「開かれた」状態である。場所も最初から最後までホームの前のベンチで，初めも終わりも五人の女たちは同じ状態でそこに座っている。

この話の冒頭には前書きともとれる，女たちのいるあたりの風景描写があり，唯一その点が，掌編小説の特徴にはないところである。しかしこの箇所は，詳しくは後に改めて取り上げるが，これから始まる話の前置き，あるいは説明というよりも，テーマを象徴しているともいえる重要な部分である。

登場人物はマリー，ルイーゼ，パウラ，エミーリエ，イーダという老人ホームに入居している五人の女たちである。それぞれがベンチに座って，自分の人生について回想している。マリーは生涯一人で，ソーセージの行商をしながら村々を歩き回っていた。ルイーゼは早くに夫に先立たれ，女手一つで四人の子供を育て上げたが，子供たちは遠方で，誰一人母親を引き取ろうとはせず，ホームに訪ねてくることもない。パウラは紡績工場で 23 年間，出来高払いでただひたすら働き，銀行に預金ができた。ホームには毎週養子がやって来る。エミーリエは教師として高収入を得ていたが，旅行好きの浪費家だったため，現在はひどく貧しい。今でも王子様がやって来るのを待ち続けている。イーダは夫婦で貧乏をしながら五人の子供を育て，孫もたくさんいるが，夫には先立たれてしまった。一ヶ月後は息子が迎えにきてホームを出ることになっているが，それは嫁が仕事に出ている間，孫たちの世話をするためである。

この五人の女たちの人生は，構成という点から見ると，ほぼ同じパターンで語られている。多少表現は違っているものの，それぞれの人生が他の者たちの人生と，あるいはその前に語られた人生とは「違っていた」という書き出しで始まり，各自の人生が断片的に語られる。そしてその人生に対して，他の人の否定的な評価が述べられるが，それについては，本人は「深くは考えない」そして自分の人生に「満足している」と締めくくられている。それぞれの人生はこのように同じパターンで語られることによって，リフレインのようなリズムが生まれ，また「違っている」という書き出しによって，前後の記述の連鎖という関係が作り出されている。

3. 風景描写の効果

先に述べたように，この作品の冒頭には掌編小説としてはめずらしく，導入部ともいえる次のような風景の描写がある。

> ベルテスダ・ホームと，カルメル・ホームにつながるツィオン・ホームの間に張られた洗濯ロープに寝巻きが干してあった。厚手の丈夫なフランネル地で，襟と袖の付いたボタンのある寝巻きだった。生地をたっぷりと使ったアイロンがけのしやすい寝巻きだ。色はくすんだ白で，ときにくすんだ黄色のものもあった。これらの老人ホームで大掛かりなベッドの点

検があったに違いない。寝巻きは全部見渡せないほどずらっと並んで，風にびくともせず，慎み深く，ロープに掛っていた。何着か柄物もあって，その花柄は色褪せてしまっていたが，生地は丈夫で，長年の洗濯にも耐えてきた。パターンはすべて同じで，身ごろは丈長幅広，ボタンを閉めると襟が立つようになっていて，その上にリボンを結ぶと襟が首回りにフィットするように作られていた。細めの長袖の口はボタンで手首のところに留められるようになっていた。23着の寝巻き，それがベルテスダ・ホームとツィオン・ホームとカルメル・ホームの間に干してあった。(34)

これは老人ホームが建ち並ぶ中に，洗濯してロープに吊してある寝巻きについての描写であるが，単に物語の背景を説明しているわけではない。ここに出てくる年老いた女たちやその人生を象徴している重要な部分だと考えられる。話のタイトルにもなっている「寝巻き」にかかる形容詞は，そのまま五人の女たちにかかる形容詞だと解釈することができる。

まず，寝巻きの色は「白」や「黄色」であるが，それは真新しいものではなく，すでに使い古しているため，「くすんで」いる。つまりもう若くはない，年老いた女たちを喩えたものである。また寝巻きの「パターンはすべて同じ」である。これは文中で女たちについて，「五人の痩せた女はみんな似ていた」，「子供はみんな同じように見えて間違えるが，年寄もそうである」(34f.) という含みのある表現をしているが，それと同じで，加齢によって風貌が似てきた女たちを表したものである。

さらに，寝巻きは「丈夫な」生地でできており，「風にびくともせず」，「慎み深く」干してある。これはさまざまな困難にも負けず，逞しくそして謙虚に生きてきた女たちそのものである。長い人生の中にはときには「花柄」，つまり華やかなことや楽しかった想い出もあっただろう。しかしそんな想い出も今では「色褪せて」しまっているというわけだ。またこれらの表現は女たち自身と同じように，女たちの人生も象徴していると考えられる。

このように，この冒頭は女たちやその人生の重要なメタファーとなっているが，それだけではなくもう一つ，この短篇全体の映像的な効果の一端を担っている。最初に広々とした風景を描き出し，それから一挙に焦点を一人一人の女に当てている。女たちの回想の部分がカット・バックの映像だと考えれば，全体で一つの映画のような効果が生まれる。

4. 五人の女たちの人生

最後に物語の主要な部分，五人の女たちの人生についての記述を分析してみよう。ここは先に述べたように，同じパターンによって語られている。その同じところに注目しながら，それぞれの回想の部分を見ていこう。まず，二十年間，ソーセージの行商をしながら村々を歩き回ったマリーの回想である。

… ただ一人だけ，そんなごまかしには関心がなく，恥も外聞もなく，歯のない口を大きく開けていた。それがソーセージ売りのマリーだった。マリーは歯茎を健康にしようということには全く心が動かなかった。その代わり，上等な靴に絶大なる価値を置いており，底の薄い，みすぼらしいサンダルは全て軽蔑していた。高速道路が谷間にまだ通っていない頃だったので，マリーは生涯，道を歩いて村々を回った。三つの村を通ってソーセージを売り歩い

た。 …（略）… マリーは思わず微笑んだ。ひょっとしたら自分の人生は素晴らしいものだったのかもしれない。 …（略）… 語る価値などほとんどない，重要でない人生，なんと平凡な人生。そんなことマリーは少しも考えない，マリーは一人の幸せな老女なのだ。マリーの体には今でもすえたガーリックの匂いと，草原の小道を照らす太陽で日焼けした色がこびりついている。（35f.）

最初に他の者たちとは違うということが強調されている。他のメンバーは「入れ歯を落とさないように，口を軽く閉じているのが習慣だった」(35) が，マリーだけは違っていた。「恥も外聞もなく，歯のない口を大きく開けていた」のだ。マリーは「自分の人生は素晴らしいもの」だったと思っている。つまり自分の人生に満足しているのだ。「語る価値などほとんどない，重要でない人生，なんと平凡な人生」というのは，そんなマリーの人生に対する，他の者たちの感想である。だが彼女はそんなことについては「少しも考えない」のである。

次にルイーゼである。未亡人になってパン屋で働きながら息子二人と娘二人を育てたが，二人の嫁とは折り合いが悪く，二人の娘は自分たちのことだけで手一杯で，誰もルイーゼを引き取ろうとはしない。

それに対して，ルイーゼは結婚していた。事情は全く違っていた。ルイーゼはベンチに，ソーセージ売りのマリー，ばかな老女から少し離れて座っていた。ルイーゼの夫はペンキ屋だったが働き盛りに早世してしまった。繊細な人間だけが命を奪われる，粗野な人間はかからない病気で。ルイーゼには四人の大切な子供がいた。 …（略）… もはや誰も耳をかたむけようとはしない。みんなこの話をもう知っているのだ。未亡人は一人でも十人の子供を育てることができるが，その子供全員でも一人の母親を養うことはできないと言っている。ルイーゼはクリスマスさえも一人ぼっちで，プレゼントさえない。他の人は良く知っていて，蔑むようにルイーゼを見る。なんて運のない，なんて平凡な，なんてありきたりな人生，ルイーゼはそんなことについては何も考えない，喜んでいるのだ，手術に耐えぬいたことを。（36-38）

ルイーゼは，マリーと違って「結婚していた」し，「四人の大切な子供がいた」。そのことが誇りであり自慢であったのだろう。だからマリーのことをばかにして，「少し離れて座って」いるのだろう。しかし彼女の話に「もはや誰も耳をかたむけようとはしない」のは，その誇りと自慢ゆえ，同じ話を繰り返すからであろう。そして自慢の「大切な子供」から見離され，「クリスマスさえも一人ぼっち」でいるルイーゼを，哀れみを通り越して「蔑む」ように見ている世間は，「未亡人は一人でも十人の子供を育てることができるが，その子供全員でも一人の母親を養うことはできない」と皮肉な見方をしている。「なんて平凡な，なんてありきたりな人生」と言われても，ルイーゼはマリーと同じように，「そんなことについては何も考えない」。自分の人生において大事件であった「手術」がうまくいったことを「喜んで」いる，つまり自分の人生に満足しているのだ。

さらにパウラの場合はどうだろうか。工場の流れ作業の中で23年間，もくもくと働き，そのこと

に誇らしさを感じているが，休暇にどこかへ出かけるというようなこともなく，日々節約に節約を重ねて貯蓄にいそしんだ人生だった。

> そこがパウラの場合は違った。パウラのところには毎週養子がやって来た。パウラは銀行に預金がある。…（略）… いくらかぎこちない動き，肩のこわばり，表情の乏しさ，本人は気づかなかったが，そういうものが残ってしまっていた。パウラは生涯同じ工場で働き，長年働いた功績でボーナスと金時計をもらった。…（略）… パウラは故郷へ帰るか，家で寝ていた。傍で見ている者はそんな暮らしを，言葉で言い尽くせないひどい暮らし，なんて狭い世界，なんという貧しさだろうと繰り返し言う。パウラはそれについて深く考えたりはしない，満足していた，蓄えがあるのだ。（38 f.）

子供がいても誰も訪ねてこない，孤独なルイーゼとは違って，パウラのところには「毎週養子がやって来た」。しかしそれは「パウラは銀行に預金がある」からだというのが，周囲の皮肉な，そして自然な見方ではないだろうか。確かにお金はたまったが，工場と家を往復しただけの人生に，傍観者は「言葉で言い尽くせないひどい暮らし，なんて狭い世界，なんという貧しさだろう」と驚くが，パウラもまた，「それについて深く考えたりはしない」し，自分の人生に「満足していた」。何といっても，「蓄えがあるのだ」から。

それでは教師として働き，汽車にゆられるのが何より好きだったエミーリエの回想はどうなっているだろうか。エミーリエは自分のところに誰かが現れるのを待っていた。一度もそういうことがなかったわけではない。だが現実に誰かが現れたとき，彼女はそこから逃げ出してしまった。自分から誰かのところへ行こうとしないだけではなく，実際に誰かがやって来るのも怖いのである。誰かが現れるといいなと思いながらただ「待っている」だけなのである。人間関係に関してはきわめて受身で，臆病だといえよう。

> そこがエミーリエの場合は違った。かつては教師だったが，銀行には何もなかった。学校の休暇中には何度もあちこち旅行し，生活を大いに楽しんだ。放浪者であり，浪費家だった。その代償として，長い間良い収入を得ていたのに，今はひどく貧しかった。…（略）… エミーリエは小柄で歯並びが悪いが，多くの女性は歯並びが悪くても結婚している。エミーリエは待っている。退屈があたりまえのことになっていて，もはや意識されていなかった。慢性の便秘や貧血のように，エミーリエの体のすみずみにまで，体の奥にまで浸透していた。
> …（略）… 何という無益な，何という退屈な存在なのだ，その存在の無意味さときたら，ひどいものだ。エミーリエは何も語らない，他の者たちもまた何も尋ねない。エミーリエは待ち，そして満足している。鐘が鳴り，午後の終わりを告げるまで待っている。待つことと退屈さには慣れてしまっている。（39-41）

「銀行に預金がある」パウラと「銀行には何もない」エミーリエの場合は確かに違う。また休みの日も「故郷へ帰るか，家で寝ていた」だけのパウラに対して，エミーリエは「何度もあちこち旅行し」て，「生活を大いに楽しんだ」。しかしそれでも「退屈」が「あたりまえ」になっていて，「慢性の便

秘や貧血のように」,「体のすみずみにまで，体の奥にまで浸透していた」のでは,「何という無益な，何という退屈な存在なのだ，その存在の無意味さときたら，ひどいものだ」と言われても仕方がない。しかしエミーリエもやはり「満足している」。「何も語らない」のは「待つことと退屈さ」に慣れてしまったからなのか，それとも「他の者たちもまた何も尋ねない」からなのか。そこにもエミーリエの受身の姿勢が現れているといえよう。

最後にイーダの人生を見てみよう。誰も来るあてがないのにひたすら待っているエミーリエに比べて，イーダの場合は実際に息子がやって来る。一ヶ月後には老人ホームを出ることになるというのだから，確かに他の者たちと決定的に違っていると言えるのかもしれない。65年前に結婚し，夫と二人，貧乏の中で働き続けて子供たちを育てた。夫が他界し高齢になった今，住み慣れた老人ホームを出る理由は,「孫たちの面倒をみる」ためだという。息子が迎えにくるのは労働力として必要になったからだと思うのは考えすぎだろうか。

> そこがイーダの場合は違った。イーダはもうあと一ヶ月だけ老人ホームにいることになっている。一ヶ月したら息子が迎えにきて，嫁が仕事に行っている間，孫たちの面倒をみることになるだろう。イーダには子供が五人いて，みんな一人前になって，孫は17人いる。夫が生きていれば，今年で結婚65年になる。いい夫だった。 …（略）… 何にもならないものに何という浪費をしたのだろう，何という無意味な流れなのだろう，何というつまらなさだろう。イーダはそのことについて深くは考えない，満足している。ひょっとしたら来週には息子が迎えにくるかもしれない。そうしたら，孫たちの面倒をみることができるだろう。
> (41)

働き通しだったイーダの人生，そして晩年になっても働かなければならない彼女の人生を，他人は「何にもならないものに何という浪費をしたのだろう，何という無意味な流れなのだろう，何というつまらなさだろう」と考える。しかしイーダもまた「そのことについて深くは考えない」し,「満足している」。それどころか一ヶ月後ではなく「ひょっとしたら来週には」息子が迎えにくるかもしれないと期待し，働かなければならないというのではなく,「孫たちの面倒をみることができる」と考えているのだ。

これまで見てきたように，五人の人生に共通するのは，他人の目には「つまらない人生」だと映るかもしれないが，当人たちは「深くは考えず」,「満足している」ということである。あるいは満足するためにあまり考えないようにしているのか。またそれぞれの回想の冒頭で，ことさら他の者たちとは違った人生を送ったということを強調しているが，それにもかかわらず他人の目には，老人たちの姿と同じように，その人生も全て似たり寄ったりにみえてしまうということである。今ここで他人の目と述べたが，それはまた，読者の目ということでもある。それぞれの回想部分に,「意味がない」だの「平凡」だの勝手な第三者の評価が挿入されているが，それはそのまま，大方の読者の感想でもあるのではないだろうか。

ではマイアーはこの作品で，無意味でつまらない人生を送った気の毒な女たちについて描こうとしたのだろうか。それを解くカギはやはり文中にある。女たちの回想が始まる前と最後に次のような箇

所がある。

> 女たちの背後に，あるいはひょっとしたら女たちの内部に，それを見る目がありさえすればわかるのだが，女たちの過ぎ去ってしまった人生が横たわっていた。取るに足らない，意味のない，平凡な，全く余計な，意義深い，秘密に満ちた，辛い，喜びあふれる，輝かしい…，誰がわかるというのだろうか。（34）

> 女たちの人生は，女たちの背後にあるのかもしれないし，女たちの内部にあるのかもしれない。それを見る目がありさえしたら，理解できただろうに。（42 f.）

この二つの箇所の，特に「それを見る目がありさえすればわかるのだが」という部分と，「それを見る目がありさえしたら，理解できただろうに」という部分は，ドイツ語では接続法Ⅱ式という形で書かれている。この形は非現実の仮定を表現するときに使われる用法である。つまり現実にはこれらの箇所は「見る目がないからわからない」，「見る目がなかったから，理解できなかった」という意味である。これはさらに「誰がわかるというのだろうか」，すなわち誰にもわからないのだとあることからもはっきりしている。

五つの人生に対し，読者を含めた他者がつまらない人生だと感じるのは「見る目がないから」なのであって，それらが本当につまらない人生だということにはならない。また，「見る目がない」のは何もその人が悪いわけではなく，そもそも他人の人生を「見る目がある」人などいないのだ，ということもできよう。大切なのは他人が何と言おうが，本人が「満足している」ことであり，他人の人生を自分の目で評価してしまうことは僭越な行為になろう。

5. おわりに

デビュー作である『乾いた草原』に収められている23篇全てでマイアーは，精神的あるいは（加齢も含めて）肉体的に何らかのハンディを持った主人公たちを登場させている。そしてその中の半分以上を年老いた女性たちが占めている。マイアーはその女性たちの孤独な生活を描きながら，皮肉やユーモアを交え，女たちの心の内を浮き彫りにしている。

『寝巻き』で描かれる五人の女たちの人生は他人には平凡でつまらない人生に映るが，先にも述べたように，大切なのは他人の目ではなく自分自身の満足度である。自分の人生を評価できるのは自分しかいないのである。しかし逞しく慎ましく生きる女たちも，自分の幸せを100％確信しているわけではない。誰でもがそうであるように，「これでよかったのだろうか」という一抹の不安は感じているように思われる。マリーは「ひょっとしたら」素晴らしい人生だったのかもしれないと思っている。この「ひょっとしたら」という思いは全員のそんな揺れ動く気持ちを代表しているといえよう。「ひょっとしたら」もっと幸せな人生があったのかもしれない。あえて「考えない」ことが繰り返し強調されているのも，皆が少しもあるいは深く「考えない」のではなく，「考えない」ようにしているのかもしれない。そしてそれは，心の奥にひそんだ迷いを一掃しようという体に根付いた生きる強さなのだろう。

またそれぞれの人生の結果として，マリーには「すえたガーリックの匂いと日焼けの痕」，ルイー

ゼには「全く行き来のない子供たち」，パウラには「お金と，ぎこちない動き，肩のこわばり，表情の乏しさ」，エミーリエには「待つことと退屈さへの慣れ」，イーダには「まだまだ世話を焼かねばならない子供と孫」が残った。これらの結果を見て「無意味な人生だった」というのは「見る目がない」評価であり，女たちの人生は「女たちの背後に」，あるいは「女たちの内部に」しっかりと跡をとどめている。重要なのは何をという結果ではなく，どのようにという過程である。苦労はしても想い出に浸れる人生がある五人の女たちは幸せと言えるのではないだろうか。

最後に，短篇集の『乾いた草原』というタイトルだが，これも意味の深い言葉である。「草原」は本来，青々として瑞々しいものというイメージをもつ。それに作者はことさら「乾いた」という形容詞をつけている。これはこの本に登場する，精神的あるいは肉体的にハンディを持った主人公たちを象徴しているのだろうか。あるいはそういう主人公たちは，一般の人々にはもう「乾いて」しまっていると見えるが，実は内面はまだまだ瑞々しい「草原」なのだということをいわんとしているのだろうか。蛇足になるが，『寝巻き』の冒頭に，「風にびくともせず，慎み深く，色褪せても，長年の洗濯にも耐えてきた」23着の寝巻きが並んでいる場面がある。『乾いた草原』に収められている話も23篇である。この数字が偶然に一致したものとはとても思われない。寝巻きは五人の象徴に止まらず，『乾いた草原』の主人公たち全員を象徴しているような気がしてならない。

注

本文の引用は全て次の版からの拙訳である。

Helen Meier : Nachthemden. In: Trokenwiese, Frankfurt a. M. 1986, S.34-43.

なお，文中の引用箇所には，（　）内にページ数のみを記した。

参考資料

Manfred Durzak : Die Kunst der Kurzgeschichte. München 1989.

Leonie Marx: Die deutsche Kurzgeschichte. Stuttgart 1985.

Heidy M. Müller : Helen Meier.
In: Kritisches Lexikon zur deutschsprachigen Gegenwartsliteratur. München 1990.

Hans-Christoph Graf von Nayhauss (Hrsg.): Theorie der Kurzgeschichte. Stuttgart 1977.

Ludwig Rohner : Theorie der Kurzgeschichte. Frankfurt a. M. 1973.

Rudolf Käser : Die Literatur der deutschsprachigen Schweiz. Zweiter Teil.
In: Beatrice Stocker, u.a., Die vier Literaturen der Schweiz. Zürich 1995, S.31-82.

（てらしま　まさこ　　総合教育センター）